

氏名(本籍)	かわぐちみちろう (熊本県)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	博乙第1,023号
学位授与年月日	平成6年11月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	ペスタロッツィ主義唱歌教育論の研究
主査	筑波大学教授 長谷川 栄
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 山内 芳文
副査	筑波大学教授 教育学博士 中村 満紀男
副査	筑波大学教授 教育学博士 片岡 暁夫

## 論文の要旨

### 1. 構成

論文は、序論、本論第1部4章と第2部6章、結論より構成され、本文387頁、付録10頁、文献および史料8頁から成る。

### 2. 目的と方法

わが国の学校の音楽教育は、明治10年代に唱歌教育として始まるが、アメリカを経由して導入された「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」に基づくものである。これは、唱歌を構成する音とその動きと仕組みを縦と横の関係においてとらえ、数と形で提示すると同時に、それを語に代わる機能をもちうる符号によって表示し客観化して、音の直観に基づいて唱歌を数える方法の原理のことである。

研究の目的は、明治10年代に成立して展開される唱歌教育について調査し、その原理と方法を分析して、「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」の歴史的意義を明らかにすることである。

研究方法としては、「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」に関わる文献を収集して、それを解釈することが基本である。その際の視点と手続きは次の三つである。第一は、子ども独自の音楽思想を近代教育思想に求めて、それを明らかにすることである。このためにルソー、汎愛派、そしてペスタロッツィの音楽観や唱歌教育論に関する文献が検討される。第二は、ペスタロッツィの教授論の適用によってどんな唱歌教育論が体系化されたのかを解明することである。このために、スイスのプファイフェルとネーゲリやアメリカのメーソン等の唱歌教育の文献が分析される。第三は、わが国に導入された「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」の構造と特徴を検討して、その歴史的意義をとらえ直すことである。ここでは、文明開化のかなでの音楽の動向、「保育唱歌」作成の経緯、唱歌教育の方法論と実際

等のことが分析される。

### 3. 研究結果の概要

研究は二つの部分より成り立っている。第一部は、「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」の成立の経過およびその性格と構造を明らかにする。第二部は、「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」がわが国に導入された経過とその語の展開について吟味する。

第一部では、まず「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」の成立の前提として、ルソーおよび汎愛派の音楽観や音楽の方法が検討され、子どもの音楽についての思想と方法が明らかにされる。その上で、ペスタロッツィ自身が唱歌をどのようにとらえ、理解しているかが問題にされる。彼の唱歌に関して扱っている諸著作「ゲルトルートは如何にその子を数えるか」(1801)等を取り上げ、彼の唱歌の理解が吟味されると共に、直観概念を明瞭にしてそれを唱歌教育に適用する可能性が論究される。

次いで、ペスタロッツィの教授理論に基づいて構想され体系化された「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」が分析され検討される。主としてプファイフェルとネーゲリの論文(1809)や著作(1810)が検討され、楽音の直観による把握、音の自覚的操作能力の形成から音楽技能、作品の演奏へいたる唱歌教育の体系化等が明らかにされる。

さらに、アメリカに移入された「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」が吟味される。ウッドブリッジの「音楽について」(1831)やメーソン編集の「唱歌手引書」(1834)が分析されて、プファイフェルとネーゲリの方法論と基本的枠組みが同じであること、唱法と記譜法の基礎技能が中心であることが明らかにされる。

第二部では、まず、わが国に「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」が導入される時期の音楽の文化的状況において、「和洋折衷」の方法論を基本に据えざるをえなかった事実が明きらかにされる。「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」は、音楽取調掛の事業を通して導入されるが、そこでの音楽伝習生や師範学校生徒の養成が検討される。音楽取調掛伝習生の「音楽伝習生規則」、「教科細目」や、師範学校生徒の「唱歌教授細目」を分析して、それらが共通して、音の技術的性質とその系統性を客観化することが唱歌教授の方法原理であり、数・形・語(符号)を教授の手段として唱歌を教える方法であることが明きらかにされる。

次に、東京師範学校および東京女子師範学校の付属学校の「唱歌教授細目」を分析して、「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」の実践の特徴が検討される。また、メーソン著・内田弥一訳・文部章編「音楽指南」(明治17年)も分析され、これも「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」に基づくものと確認される。

これらの分析を基礎にすると共に、音楽取調掛伝習生、師範学校生徒、同付属学校生徒に対する唱歌教育の実践結果の報告などの分析に基づいて、唱歌の目的が歌詞の意味内容による儒教主義的な「徳育」にあること、その方法が「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」による西洋近代音楽の基礎技能を形成すること、つまり唱歌教育が目的と方法の「和洋折衷」の特徴と性格もっていることが明らかにされる。

さらに、「ペスタロッツィ主義唱歌教育論」は明治10年代の「開発主義」教授理論の展開のなかに包摂されることが示される。その実際については、若林虎三朗・白井毅著「改正教授術」(明治16年)

などを範例として取り上げ、「ペスタロッチイ主義唱歌教育論」が当時の唱歌教育の典型になっていることが確認される。

最後に、「開発主義」教授理論に包摂されていた「唱歌教授法」（明治17～30年）が分析され、子どもの心性の開発の思想が共通していること、一貫して音の直観が方法の原理になっていること、唱歌教育が徳育の手段にされていることが明らかにされる。

結論として、第一に、わが国の「ペスタロッチイ主義唱歌教育論」は文明開化期の音楽の文化的革新のなかで独特の唱歌教育の方法論として成立したことが指摘される。それは、「和洋折衷」の方法に基づく二重性格の唱歌教育論ということである。第二に、「ペスタロッチイ主義唱歌教育論」は、音楽の面からは唱歌の音の直観から概念へという唱歌教育の方法論として把握できる。これは音楽教育史の水面下で現在まで受け継がれていて、その歴史的意義が指摘できる。第三に、「ペスタロッチイ主義唱歌教育論」の中心概念である意の直観から概念への過程は、音楽の知識と技術をその基礎から習得することにおいて、現代的意義をもっていることが指摘される。

## 審 査 の 要 旨

わが国の学校の教科としての唱歌教育が成立するのは明治10年代であるが、本論文はこの唱歌教育が「ペスタロッチイ主義唱歌教育論」を理論的根拠として成立したと主張するものである。先行研究として山住正己氏の「唱歌教育成立過程の研究」（教育学博士学位論文）があるが、歌詞の精細な分析に主力があり、唱歌の音楽的側面の欠落という弱点をもっている。本論文は、これを克服して音楽的側面の分析をも取り入れ、「ペスタロッチイ主義唱歌教育論」を唱歌教育成立の不可欠の問題として真正面に据えて研究し、その歴史的意義を明らかにしたものである。

本論文は、わが国の唱歌教育の成立の研究に中心があるが、明治10年代の時期のみの狭い視野に眼を向けるのではなく、「ペスタロッチイ主義唱歌教育論」が生まれてくるルーツまでさかのぼって究明し、その基本的特徴を明らかにしている。この点は、ほとんど先行研究がないことからみても、高く評価されることである。しかも、ペスタロッチイの教育理論に基づいて生まれたその唱歌教育論がアメリカに移入されたのであるが、その唱歌教育論も分析し考察していることも意義が大きい。わが国の唱歌教育の成立をこのような世界的視野を考慮して、音楽文化の歴史も念頭に入れて広く考察していることは、本研究の特色として評価することができる。

本論文は、著者の長年にわたる音楽教育史の研究の成果としてまとめられたものである。広い範囲にわたって唱歌教育に関わる文献や史料を収集し、これらに的確な解釈を加え、論の構成も堅固なものがある。総体として、わが国の明治以降の音楽教育史、特に唱歌教育の歴史の研究に大きく貢献する論文として評価することができる。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。